

事例10：排水データの改ざん

重化学工業の大手、P産業の環境部門に長年勤務してきたKさんは、県から請われて嘱託として出向することになった。環境への関心が高まる中、住民の要望に応じて環境分析センターが新設されたものの、県の職員だけでは業務を賄いきれなかったため、環境調査分野で培ってきたKさんの技術と経験が評価されたというわけだ。

Kさんには環境アドバイザーという肩書きがつけられたが、専門職員が育つまでは、県内の企業に自ら出向いて排水や排気検査の監査を行うのが主な職務である。監査対象の中には当然、県内に大きな工場を構えるP産業も含まれており、日程や管轄地域の関係で、Kさんともう一人の県職員Eが同社の監査を担当することになった。

翌週から古巣に出向くという、ある日のこと。Kさんの自宅にP産業の環境調査担当者、つまり元の職場では後輩であったSさんから電話が入った。

Sさん：「来週の監査の件なんですけど、実は、工場排水が基準値を若干上回ってしまっただんです。こういうのはやっぱり、正直に報告すべきなんじゃないかな」

Kさん：「なんだって。それはどのくらい……。いや、電話ではなんだから、週末そちらに行くよ」

こうしてKさんは休み返上で工場へ行き、本来の監査より一足先に排水データをチェックした。その結果、確かに排水中の有害物質は基準値を超えているものの、環境に対する影響はほとんど考えられない量であることがわかった。そこで、KさんはSさんに言った。

Kさん：「この程度なら、基準値と同じか、ちょっと少ないことにして、報告してしまえばいい」

Sさん：「でも、計測器から直接打ち出された計測データを改ざんするのは、ほとんど不可能です」

Kさん：「県に提出する報告書だけ書き換えればいいよ。その辺は僕が何とかできると思う。たまたま僕が監査員になっていて、幸運だったというべきだな。それよりむしろ、正直に公表して、基準値オーバーというデータだけが一人歩きしたら、周辺住民に無用の不安を与えてしまう。それはかえって、よくないんじゃないかな」

この意見にSさんも納得し、データの書き換えを行った。

翌日から、P産業での監査が始まった。Kさんは何の問題もなく運ぶと踏んでいたのだが、一つ誤算があった。同行している県職員Eが、実に丹念なチェックを行ったのである。

P産業側から提出された書類を一通り見た後、県職員Eは同席していたSさんに質問した。

県職員E： 「工場排水のデータがないみたいですね。提出し忘れたのではないですか」

Sさん： 「えっ…、いえ、報告書の中にちゃんと記載されているはずですが」

県職員E： 「確かに最終データはありますけど、定期的に計測器から送信されてくるデータはないんですか。排気等には、ちゃんとそういったデータがありますよね」

Sさん： 「あ、それは、その……」

しどろもどろになっているSさんを見かねて、Kさんが口を挟んだ。

Kさん： 「自動記録装置がないんですよ。僕がいた頃も、早く導入しなければと言いながら、係りの人が計測器の数値を手書きで記録してたよね。ほら、どこかに紛れてるんじゃないの」

Sさん： 「そ、そうでしたね、申し訳ありません。明日までに探しておきます」

その場は取り繕ったものの、県職員Eの表情からは「これだけ設備の整った工場で、いまだ手書きでデータを記録しているものだろうか……」との疑いがありありと見て取れた。

その夜、いったん役所に戻ってからP産業に取って返したKさんは、Sさんと一緒に急遽、手書きデータをこしらえながら、今後どうすべきかについて相談した。

Sさん： 「Eさんは、随分融通が利かなさそうですね。こんなことなら、正直にデータを提出しておくべきだったなあ」

それはKさんの本音でもあったのだが、こうなったら後戻りはきかない。後悔を払拭するためにも、Kさんはわざと強気に言った。

Kさん： 「心配するな。あんまり細かいことを言うようなら、奥の手を考えてあるんだ」

Sさん： 「奥の手って、なんですか」

Kさん： 「Eさんは今、子供の進学とか家のローンとかで大変そうなんだ。だから、いざとなれば上の方に口を利いて、いくらか渡してもらうことも出来るんじゃないかな。別に、どこにも損害を与える話じゃないんだし、Eさんだって無下には断らないと思うよ」

Sさん： 「それって、リベート……！」

Kさん： 「しっ、声が大きい。別に会社の利害とか、自分の面子とかばかりを考えて、こんなことを言っているわけじゃないよ。昨日も言ったように、四角四面にデータを優先させて、いたずらに社会に不安を与えたくないと思うからだよ」

後輩にだけでなく、自分にもそう言い聞かせながら、Kさんは深夜まで虚しい作業を続けた。